

トン族歌謡の漢字表記とその方法

— 〈歌〉を文字に書くことについて—

Kanji Notation of songs of the Dong People and its Methodology: About Writing “Songs” in Chinese Characters

神奈川大学・國學院大学非常勤講師

曹 咏梅 CAO, Yongmei

一、はじめに

古代中国に発明された漢字によって、中国には多量の漢字文献が残された。その漢字は東アジアの周辺国家や民族に伝わり、漢字を基盤として東アジアの共有する文化圏、いわゆる漢字文化圏が形成された。漢字は中国の伝統文化を記録するための文字であったが、周辺諸国も漢字を用いて漢文・漢詩を記録することが行われた。そのような中で無文字社会が長く続いた民族における独自の言語を漢字表記することは、漢字文化圏に参画したとしても容易ではなかった。なぜなら、漢字表記は漢文を書き記すための方法であり、それは口語と異なる体系にあったからである。中国においても白話（口語）を表記する方法が成立するのは、唐代以後のことである。そうした漢字文化圏にありながら、自民族語を表記する努力が続けられた。韓国の吏読、越南の字喃（チュノム）、日本の仮名（古くは漢字利用による仮名）、ペー（白）族の白文（ペー文）など、それぞれに漢字が自国語や自民族語を表す方法として成立していったのである。

そのような中で、民族の伝えてきた歌謡を記録する段階に入った。無文字文化圏において歌謡は口承によって綿々と伝わってきた。韓半島や古代

日本では漢字の輸入とともに漢字を借りて〈歌〉を表記する方法が考案され、韓国では「郷歌」が成立し『三国遺事』に収録されている。古代日本の『万葉集』や『古事記』は漢字による仮名表記が駆使され、特に古代歌謡は一字一音表記によって統一されている。このような民族語による歌を漢字により表記する方法は、現在の中国少数民族にも見られる。文字を持たなかった民族は知識階級を除き、前近代まで無文字社会に属していた。少数民族が歌を書き記す段階を迎えたのは、文字利用が可能になったのみではなく、民族の歌謡が消滅することへの危機感もある。

漢字利用による〈歌〉の表記については、古代日本の『万葉集』が典型的な状態を示していることから、少数民族歌謡の漢字表記との比較からアプローチする論が見られる。遠藤耕太郎氏はペー（白）族の漢字表記をモデルとして古代日本の歌を考察し^(注1)、毛利正守氏はナシ（納西）族の書記行為から古代日本の書記の有り様を探ろうとしている^(注2)。少数民族の漢字表記と古代日本とは時間的に隔たりがあるということは言うまでもないが、しかし無文字の民族が漢文化や漢語を習得することによって、漢字で自民族の言語を記録しようとする行為や方法は、古代日本の漢字表記の研究に糸口を与えることは確かであろう。

中国には現在漢民族以外に55の少数民族があ

る。歴史上文字を持つ民族もあれば、文字を持たない民族もある。政治や経済や文化などが発展すると、必然的に民族の文化を記録することになる。貴州省に住むトン（侗）族という民族は、歌によって著名な民族であるが、やはり前近代には文字を持たなかった。そのトン族も漢字を用いる時代に入り、トン族の言語を漢字によって書き表すようになった。それらはトン族の款詞（村の規約など）や祭詞（祭師による祝詞）、トン戯書（戯劇の脚本）、歌書（歌のテキスト、歌本ともいう）などに書き記されて伝わっている。それらは現在でも一部の歌師や祭師の手になり記録しており、これらの記録行為を現地では「漢字記侗音」（漢字でトン音を記す）という。

ここには、無文字社会の民族が漢字という文字をもって民族語を書き記すという1500年以上の歴史が東アジア周辺に存在したことが知られる。そのことから、本稿ではトン族社会が獲得した漢字表記の状況について俯瞰し、トン族における大歌の漢字表記の形成と方法とに注目して考察していきたい。

二、トン族と漢字表記

トン族は一般的に古代百越民族の後裔といわれるが、具体的に百越のどの支系に由来するかについては諸説がある。トン族は唐宋時代または唐宋時代以前にすでに単一民族として形成されたといわれる^(注3)。トン族の名称は多くあり、「干」(gaeml)、「更」(geml) 或いは「金」(jeml)などは自称であるが、これは漢字を用いてトン語を表記したものである。また「侗(洞)人」、「洞(侗)民」、「侗族」などは他称で、ほかの民族がトン族をいう時に使う。トン族は中国西南の貴州省を中心として湖南、広西、湖北省西部などの地域に住居している。2010年度の国勢調査によれば、人口は約288万人という。トン族の使用する言語は漢蔵語系壮侗語族侗水語系に属し、トン語はさらに南部方言と北部方言に分かれている。トン族は歴史上文字のない民族であるが、1958年に政府はラテン文字を表音記号としたトン文字を創製し

推し進めた。新しいトン文字は、たとえばトン族の自称を「gaeml」と書き、「g」が声母、「aem」が韻母で、最後の文字「l」は声調を表す。しかし、このトン文字は筆者が現地調査で見たかぎり、使いこなせるのは一部の人に限られていて普及されていないように思われる。

トン族の地域では古くから民族の歴史や文化、生産生活の知恵、人生哲理、儀礼規範などすべて歌や語りなどで口承されてきた。中央王朝がトン族地域に学舎を建て始めるのは宋代になってからである。明・清代になると府学、県学、書院、館舎、義学などの学堂を多く建てることにより、漢文を習得したトン族の知識人が現れ始め、またトン族社会では芸術性の高い長編叙事歌が伝承されたり、トン族文化が相当発展し、民族文化の「記録」行為が切実に求められるようになり、このような社会情勢から漢字を用いてトン語を表す漢字表記が現れるようになったという^(注4)。このように文字のない民族が漢字と接触することによって、漢字を用いて自民族の文化を記録することはどの国も同様であり、歴史の必然であっただろう。

トン族社会で漢字表記を用いて民族文化を記録するのは明清時代からであるが、一方、中央王朝側の史書などの漢文献に少数民族の言語を漢字表記で記したものが確認できる。『宋史』西南溪峒諸蛮に「盧溪諸蛮以靖康多故，縣無守禦，狃狔乘隙焚劫。……乃以其田給靖州狃狔楊姓者，俾佃作而課其租，所獲甚微。」^(注5)とあり、また宋・陸游の『老学庵筆記』巻四に「辰，沅，靖州蛮有狃狔，有狃獠…」^(注6)とあり、「狃狔」は蔑称である。中国歴代の文献では周辺民族を夷，戎，蛮，狄と表し、少数民族の名称を部首に「犛」を使って記すことから「狃狔」は侮辱の意を表し、本来は「仡伶」と記すべきである^(注7)。この「仡伶」は、反切の方法でトン族の自称「干」(gaeml)を表記したものと指摘されている^(注8)。

また清代には地方志に少数民族の言葉を収録した記事が見られる。地方志はその地域の自然や政治、経済、歴史、文化などについて全面的かつ系統的に記した資料価値の高い文献である。清・道光九年(1829)刻本『慶遠府志』には、

獠言語與漢迥別，如呼父曰爸，母曰嫗，兄曰懷，弟曰儂，穿衣曰登穀，喫飯曰饅餸，吃酒曰饅考，食肉曰饅難之類。^(注9)

とみられ、獠(僚)語は漢語と遙かに違うといい、「父」は僚語で「爸」というなどと、八つの言葉について一字一音の漢字で僚語の読みを記している。トン族と僚人との関係については、すでにトン族の由来を古代越人から僚人へ、僚人からトン族を含む民族共同体が形成され、越人一僚人—トン族という形成が指摘されている^(注10)。また明・鄭露『赤雅』に「獠亦僚類」^(注11)とあり、トン族は僚の後裔とも思われる。だが、「僚」はトン族を含む少数民族共同体を指すと思われ、「僚語」はトン語を含む少数民族の言語を指すと考えられる。これらの僚語をトン語と比較すると、龍耀宏氏によれば「兄」、「父」、「飯」の漢字表記の音が今日のトン語と違う以外にほかは一致するという^(注12)。また清・道光二十六年(1846)刊本『龍勝庁志』には、

矜語天曰捫，地曰捏，日曰捫，月曰臉，星曰醒，風曰令，雲曰欲，雷曰巴，雨曰丙，父曰不，母曰内，吃飯曰揀考，吃酒曰揀窖，吃肉曰揀南。^(注13)

と記されている。『龍勝庁志』に「矜与侗同」(前掲書)とあることから、「矜」(伶)は侗(侗)と同じで、「矜」(伶)はトン族の自称を指すと思われる^(注14)。「天曰捫」は「天」をトン語で「捫」と、一字一音の漢字で表記している。これらの言葉とトン語との関係についてはすでに張民氏が詳細に比較分析しており、「雲曰欲」の「欲」を除いて、ほかはすべてトン語の音と一致、或いは近いという^(注15)。『龍勝庁志』にはこのような一字一音の漢字表記でほかにも苗語、獠(瑶)語、獠(壮)語を記載している。地方志の中でわりと多くのトン語を収録しているのは『光緒古州庁志』である。「古州」は今の貴州省榕江县を指す。清・光緒十四年(1888)刻本『光緒古州庁志』巻一に、

侗家語新採，天謂悶，地謂堆，鳴雷謂岬，下雨奪聘，天晴謂悶向，下雪謂奪内，風大謂輪老，日謂向，月出謂仔悶，星出謂細悶，……吃茶謂計血，吃煙謂計彦，吃酒謂計拷，吃飯

謂計苟，吃菜謂計罵，肉謂覽，魚謂霸，水牛謂啞，黄牛謂辰，猪謂庫，馬与漢字同，鷄謂介，……父謂補，母謂母，兄謂歹，弟謂儂，大人謂猛大人，大老爺謂吓雖，先生謂先散…。^(注16)

などと106の語彙を収録している。ここには自然現象や自然の名称から家畜や穀物、数字、人体部位の名称、家族の呼び名、また酒を飲む、御飯を食べる、出かけるなどの動詞を含む言葉まで、日常生活でよく使われる言葉が収録されている。「新採」とあることから、おそらく編纂者が古州地区を調査してトン族と直接接触してトン語を採録したと思われる。基本的に漢字を用いてトン語の発音を表す表記方法で記している。たとえば、「父謂補」は、父をトン語で「補」というとある。「補」は現代中国語では「bǔ」と発音し、『侗漢詞典』によればトン語で「bux」と発音し^(注17)、現在使われているトン語とほぼ一致していることがわかる。『光緒古州庁志』に収録された語彙の中で約72の語彙が今なおトン族の人に使われているという^(注18)。また『光緒古州庁志』には、「馬与漢字同」(馬は漢字と同じ)、「鞋与漢字同」(鞋は漢字と同じ)と記したのがあり、「馬」と「鞋」のトン語の発音が当時の漢語と同じ発音であることを記している。『光緒古州庁志』にはトン語以外に苗語、生苗語、水家語、壮家語なども漢字表記を用いて収録している。

以上のように、地方志に記録されたトン語の語彙は当時のトン語の発音や一字一音の表記の状況を理解するのに非常に有力な資料である。だが、これらの漢字表記が民間におけるトン族の知識人たちの行う方法を直接採録したものか、或いは編纂者がトン語の音を漢字で記録したかは残念ながら知られない。

トン族の多くの村には漢字表記を用いて記録した書物が伝わっている。欧俊嬌氏は、民間に伝わる書物は主に、「大歌」類、「琵琶歌」類、「祭薩神詞」類、「耶詞」類、「款詞」類、「戯劇本」類、「占卦卜辞」類、「古根藤録」などの遷徙類、「埋岩理詞」類、「都茶(祭祀)」類などの内容が含まれているという^(注19)。これら民間に伝わる書物は

大きく祭詞、款詞、トン戯書、歌書などに分類できると思われる。

「祭詞」は薩を祭る祭詞やほかの儀礼活動で唱える祭詞が含まれる。薩はトン族の信奉する至上の女神であり、「祭薩神詞」といえば薩の祭祀に用いる詞である。たとえば、1985年に向零氏らによって貴州従江県九洞地区で漢字でトン語を記録した経書『東書少鬼』の写本が発見されたが、これは明代後期の写本であると推定されている^(註20)。向零氏によれば、『東書少鬼』は巫師の中でも権威のある大巫師だけが持ち、師匠から弟子へと代々伝わり、当時経書の所有者は十四代目になるのだという^(註21)。『東書少鬼』の内容は主に薩の生涯や活動地域や功績などを述べており、これは村で薩壇を設置する時だけに巫師が唱える経書である。トン族の村で薩の祭りは毎年行われるが、一般的な祭祀活動で『東書少鬼』を唱えることはタブーとされる。また老人が亡くなった時に巫師が唱える、死者の靈魂の行くべき路を指し示す『指路経』なども発見され、年代は明確ではないが、漢字でトン語を記録する方法により記されているという^(註22)。ここで一々紹介することはできないが、民間にはほかにもいろいろな祭詞関係の書物が伝わっている。

「款」とはトン族の歴史上長期にわたって存在した地縁を紐帯として、軍事連盟の性質を持つ自治組織である。この款組織を以て区域内の生活秩序を維持し、款規款約を以て款民の行為を制約する。宋・洪邁の『容齋隨筆』の渠陽蛮俗に「靖州之地、…各有門款、門款者、猶言伍籍也、借牛糞於鄰洞者、謂之拽門款。」^(註23)と「款」が記されており、宋代にはすでに存在した社会組織である。「款詞」は款組織の款規款約をいうが、実際には規約だけではなく、創世款、風俗款、祖宗入村款、英雄款、祭詞、祝語、白話歌など、トン族の民族の由来から歴史、地理、政治、経済、宗教、法律、軍事、文学、風俗など様々な内容を含む^(註24)。トン族の款詞は多く口頭で伝承されているが、手写本も一部伝わっており、また款碑も発見されている。民間の手写本で広西三江に伝わるものは清・光緒年間(1875～1908)に遡ることができる(前

掲書『侗族款詞』)。文字が刻印された款碑は清代乾隆年間(1736～1795)に建てられたのが多く、最も古いのは清代康熙十一年(1672)農曆七月初三日建立とする貴州省従江県高増寨の「高増款碑」とされており、漢文で記されている^(註25)。近年刊行された『侗族款詞』上下(広西民族出版社、2009年)は款師や巫師による款詞の口述資料を収録している。正文には漢字表記の原文、国際音声記号、トン語(新しいトン文字)、中国語直訳の順で載せ、最後に中国語意識を載せている。付録には款詞の写本の影印や『古根藤録』の影印を収録している。『古根藤録』には、楊王太子の率いる李、呉、粟、石などの十二姓の遷徙(移動)と最後に臨口、下郷などに至り居住したこと、トン族社会で六面陰規の規約を制定したこと、宋元符三年(1100)湖南通道で十条の款規を制定したことなどの内容が含まれている。『古根藤録』の写本は元々湖南省通道侗族自治県下郷郷流源村明月寨の楊光保家が所蔵したもので、最後の頁に「乾隆五年十月廿日記抄写」などあり、乾隆五年(1740)十二月二十日に写されたものであることが知られる(前掲書『侗族款詞』)。トン族の多くの地域に「款」の組織があるが、一部の地域には「埋岩」という社会組織が伝わっている。「埋岩理詞」は「埋岩」儀式を行う時に用いる「理詞」である。

トン戯は清道光年間(1828～1838)年に形成されたという^(註26)。創始者といわれる呉文彩(1798～1845)が創作したトン戯の演目『李旦風姣』、『梅良玉』は、漢族の演目を改編した内容であるが、漢字を用いて書き記したものである^(註27)。

歌書は大歌、琵琶歌、耶詞(耶は集団歌舞をいう。即興で歌われる耶歌と古くから伝わる耶詞があるが、ここは後者を指す)などが含まれる。大歌の歌書はいまなお多くの男性歌師が手写本を持っていたり、自分で漢字表記を用いて記録したりしている。こうした歌書は清代中期から現れたのではないかとされる^(註28)。中国建国(1949)後には漢字表記を用いて歌を記録した本、『侗族大歌』(貴州人民出版社、1958年)、『侗族民歌』(貴州人民出版社、1960年)、『侗族民歌選』(上海文

芸出版社、1980年）が刊行され、漢字表記の原文と中国語の意識が載せられている。その後、楊権・鄭国喬整理訳注『侗族史詩——起源之歌』上下冊（遼寧人民出版社、1988年）は湖南、貴州、広西の数名の歌師から提供された歌書を整理し刊行されたものである。正文には漢字表記の原文、トン語、中国語直訳の順で載せ、最後に歌の意識と注釈を載せている。漢字表記の原文を記した本の刊行は、漢字表記による記録行為の価値が再認識されつつあることを意味すると思われる。

トン族の民間の漢字表記による記録は一般的に、1) トン語と同音または近い音の漢字でトン語を記録する、2) 漢字でトン語の意義を記して訓読する（漢字の横或いは下に記号で印をつける）、3) 反切の方法でトン語を記録する、などの方法が用いられるという^(註29)。反切は、二つの漢字を用いて一音節のトン語を記録する方法である。ほかに、趙麗明氏は款詞や歌書に我々の知らない漢字式の方塊侗字の存在を指摘している^(註30)。この方塊侗字は前述した『古根藤録』の写本にも確認できる。

以上、トン族の漢字表記による記録について、支配者側による記録とトン族の民間で伝わる記録行為について概観してきた。中央王朝の史書などの文献には辞書みたいな形式で記され、当時のトン語の状況を窺うことができる。一方、トン族社会に伝わる漢字表記の記録は明清代に遡り、民間では歌書、トン戯書、款詞など多くの写本が伝わっているが、それはトン族のすべての地域、すべての人に浸透しているのではない。トン族社会で漢語を習得した一部の人によって記録され、伝承されている。すなわち、歌書は歌師や歌手に、トン戯書はトン戯師に、款詞は款師、祭詞は祭師や巫師によって記録され、伝承されてきたのである。またこうした書物はおよそ書いた本人しか読めない状況にある。つまり同じトン語の音でも人によって違う漢字を用いたり、一人で記す場合も同じトン語の漢字表記が一致しない場合があり、漢字表記体系が規範化されていない。しかし、これは文字を持たない民族が漢字に出会い、漢文化の影響を受けて、漢字表記を用いて記録行為へと至

る最も原初の姿を反映しているのではないかと考える。次節で筆者が現地取材した歌書の資料を取り上げる理由もここにある。

三、トン族大歌と漢字表記による記録

トン族の村は民間歌謡の郷と呼ばれ、特に南部方言地域には様々な歌が民俗生活の中で歌われる。トン族大歌とはトン族の歌の中の一つである。大歌とは指揮者がなく、伴奏のない、多声部による合唱芸術である。大歌はトン語で「嘎老」(al laox) といい、「嘎老」は漢字でトン語を表記している。「嘎」は歌で、「老」は宏大、古い意である。主に公儀の場で歌われ、音頭取り、高音や低音を歌う人がいるため、必ず3人以上で歌われる。トン族大歌は2009年に世界無形文化遺産に登録されて、国内外に名が知られるようになった。だが、大歌はすべてのトン族地域で伝承されているのではなく、南部方言地域の貴州省の黎平、從江、榕江、広西壮族自治区の三江という四つの県のみで伝承されている。大歌が伝承されている村には男性歌班と女性歌班があり、さらにそれぞれ男女の歌班は年齢によって、児童歌班、少年歌班、青年歌班、中年歌班、老年歌班に分けられる。それぞれの歌班で歌を教えるのは「歌師」といわれる人である。男性歌班に歌を教えるのは男性歌師で、女性歌班に歌を教えるのは女性歌師であり、大歌は男性の歌と女性の歌とに分かれて伝承されている。歌師になるためには歌が上手いこと、歌を沢山把握していること、歌の創作ができ、教えられることなどが求められる。歌師は村人からも人望が高く、非常に尊敬されている。文字のないトン族は、大歌も長い時代口から口へ伝えられてきた。だが、学校教育を受け、漢字を習得した一部の歌師や歌手は漢字を用いて歌を記録し、自分の歌書を持っている。

以下、貴州省黎平県岩洞鎮岩洞村で調査した漢字表記による大歌の記録行為についてみてみたい。岩洞村は大歌の伝承地域として、村には大歌の歌班があり、男性歌師も女性歌師もいる。だが、女性歌師、特に年配の女性は学校教育を受けたこ

とがなく、中国語（標準中国語、普通話のこと）の分からない人も多くいる。筆者は今まで岩洞村に数回現地調査に入ったが、年配の女性の場合はトン語の通訳を介しないと会話ができない。男性の場合は、年配の方でも中国語が普通に通じた。村には学校教育を受けて中国語を習得した中年の女性歌師もいるが、大歌の記録は行っていない。漢字を用いて歌を記録することは、岩洞村では主に男性歌師によって行われる。筆者が2015年8月7日に岩洞村で現地調査し取材した呉応清氏（1942年生まれ）もその一人である。呉応清氏は学校の義務教育を受け、中国語も普通に話することができる。小さい時から父親に大歌を習い、父親も現地では有名な歌師であったが、父親は漢字で大歌を記録することはしなかったという。呉応清氏は歌詞を思い出せない時に見ようとし、いわゆる記憶の補助手段として記録し始めたという。歌は小さいノートに横書きで、漢字を用いてトン語を表す方法で記しているが、歌によっては「×」や「√」の記号で記したのもある。呉応清氏は男性の歌師であるため、記録したのはすべて男性が歌う大歌である。

まず「会介多歌」（もし歌を歌わないと）の一節を例にあげてみたい。以下のように漢字表記の原文、トン語、日本語直訳、最後に意識をあげる^(注31)。

- ① 会 介 多 歌 正 校 仁 補 富
 hoik eis dos al jouc souc lenc buh hut
 もし ない 歌う 歌 心配 心配 以後 も 困窮
 短 吐 秀 歌 類 条 帥 也 頼
 wanh touk soh al leis dus sais yav lail
 一生 到る 声 歌 中 お腹 腸 このようによい

【もし歌を歌わないと、今後の困窮を心配するようになり、常に歌を歌うと、心の中は愉快である。】

歌は「会介多歌正校仁補富」から始まる。ここでは「歌」の表記以外に、すべて漢字を用いてトン語の音を表す方法で記している。つまり「歌」以外の漢字は古代日本の音仮名表記のようなものである。まず「も」の意を表す「補」は中国語で「bǔ」と発音し、トン語は「buh」と発音する。

声調は違うものの、声母と韻母は同じである。「よい」意を表す「頼」も、中国語は「lài」と発音し、トン語の「lail」と声母と韻母が同音である。次に、「困窮」の意を表す「富」の場合、中国語は「fù」と発音し、トン語の「hut」とは韻母は同じであるが、「f」と「h」の違いがある。「以後」の意を表す「仁」は中国語で「rén」で、トン語では「lenc」であり、「歌う」意の「多」は中国語で「duō」と発音し、トン語は「dos」である。声母や韻母が少し違っているが、これらは現地中国語の発音の影響とトン語に元々「f」や「r」の声母、「uo」の韻母がないことと関わると思われる。トン語には漢語借詞が多くあり、主に早期の漢語借詞と現代の漢語借詞があり、現代の漢語借詞は西南普通話の読み方を借り入れているという^(注32)。現代漢語借詞から「f」の声母が入って来たとしても、トン族はよく「h」と混同して使い、漢語の「r」を「l」と、「uo」を「o」と発音するという^(注33)。このように考えると、呉応清氏はこれらの漢字表記をトン語と同音と認識して用いていると考えられる。そして、「一生」の意を表す「短」は中国語で「duǎn」で、トン語の「wanh」とは韻母「uan」が同じである。「到る」の意の「吐」は「tǔ」で、トン語の「touk」と声母が一致する。さらに、「介」や「校」などはトン語と発音が類似しているものを用いたと考える。このように漢字でトン語の音を表記する場合は、トン語と同じ音またはトン語と近い音の漢字を選ぶことが知られるが、漢字を標準中国語で読むのもあれば、現地中国語の発音で用いるのもある。中国語には声母（子音）が21、韻母（母音）が36、声調が四つあるのに対して、トン語は声母が32、韻母が64、声調が九つあり、明らかにトン語のほうが多い。またトン語の韻母には「-m」の鼻音や「-b」「-d」「-g」などの促音も含まれており、中国語にない発音もかなり存在している。そうした場合はなるべく近い音の漢字を用いたり、或いは漢字でトン語の意を表し、トン語で訓読する方法をとる。

歌詞の最初の部分をみると、「歌」の上に「√」の記号がある。これは、漢字と同じ「歌」の意を表すが、トン語で「al」と発音することをいう。

つまり、トン語で訓読みすべき箇所を漢字の上に印をつけて表す。このような訓読みは同じ漢字が数回出る時には、それぞれ節の最初の漢字だけに「√」をつけ、その後の漢字にはつけない。「会介多歌」二節の歌詞にも、

② 岑 邦 岑 矮 本 血
 jenc pangp jenc taemk bens xedt
 山 高い 山 低い 常に みな
 能 鳥
 naengl nyaoh
 依然と ある

【山は高くても低くても依然と常にあり】

とあり、「矮」も同様である。「低い」は中国語で「矮」(ǎi)と表す。「矮」と記したのは、これをトン語の「taemk」と訓読みすべきことを表す。トン語の「taemk」は漢字で発音を表すことが不可能なため、同じ意味の漢字「矮」を用いてトン語で読むとする。続いて「寧帮寧矮」と出てくるが、ここの「矮」には印をつけない。また「会介多歌」の四節の歌詞には「出項」とあり、同じく「出る」意を表す漢字「出」は、トン語で「ugs」と読むとする。これは「ug」が促音であり、この発音を漢字で表せないからである。しかし、これも一貫性があるということではない。たとえば「二月洋洋」の歌には、「山に出る」を「悪岑」(ugs jenc)と表記している。トン語の「ugs」に、中国語「悪」(è)を音仮名のように用いている。促音のない中国語でトン語の促音を表す時には、促音の音「-g」を無視せざるを得ないことによる。呉応清氏の表記法では、基本的に訓読みの場合は「√」の記号で印をつける。たとえば、「二月洋洋」の歌にも、「入」(nyenc)、「喊」(sint)、「問」(haemk)と記した漢字表記が見られる。「-n」や「-m」の鼻音、また「aem」という中国語にない韻母の場合、トン語の意味を漢字で記しトン語で訓読する。もちろん訓読みの部分に印をつけない場合もある。「二月洋洋」の歌は二節の歌詞に、

③ 差 悪 長 月 二
 qadt laus ah nyanl nyih
 すぐ 入る 月 二

【二月に入ると】

とある。「二月」はトン語で「nyanl nyih」といい、「nyanl」は「月」で「nyih」が「二」の意である。ここは「月二」と書いてトン語で訓読している。さらに「×」と記すものもある。たとえば、「二月洋洋」の一節の歌詞に、

④ 悶 鬪 × 主相 講 到
 menh touk nyac juh xangp angs touk
 懐かしむ 到る あなた 恋人 話す 到る
 × 神女
 nyac singc nyih
 あなた 恋人

【心に思う人を思い出し、自分の恋人を言えば】

とある。「あなた」はトン語で「nyac」と発音し、日本語の「にゃ」に近い。中国語で「あなた」は「你」(nǐ)で、「に」の音である。漢字でトン語の発音が表せないため、「×」で記している。「二月洋洋」の歌では「あなた」の意を表す部分はすべて「×」と記して「nyac」と発音する。『侗族史詩——起源之歌』に収録されている「破姓開親」の漢字表記原文には「你」の漢字表記で「nyac」と訓読するのもあれば、「尼亜」と記して反切の方法で「nyac」と読むものもある^(注34)。「尼」は中国語で「ní」で、「亜」は「yà」である。「ni」の「i」が脱落して、トン語「nya」の音を表す。

「恋人」は、ここでは「神女」と表記している。恋人はトン語で「singc nyih」と発音し、「神女」は中国語で「shén nǚ」と発音し、類似する発音を用いている。男性の大歌であるため、恋人は女性を指す。わざわざ恋人を「神女」という漢字で表し、漢字表記にも意味を持たせていることが窺える。また、ここの「講到」はトン語の「angs touk」と同じ意味を持ち、結果的に漢字で意を表しトン語で読むことになっているが、今までの訓読の方法とは発想が違う。呉応清氏はその理由として、トン語の発音と現地中国語の発音が似ているので、直接分かりやすい漢字で記し、トン語で読むという。「二月洋洋」の歌にはほかに「聴」(qingk)、「工」(gongl)などがある。これらは今はトン語として定着しており、『侗漢詞典』にも収録されているが、実は「講(angs)」、「聴」

(qingk), 「工」(gongl) は固有のトン語ではなく、早期の漢語借詞であり^(注35)、古代漢語から来ている。こうした漢字表記の場合は、本人が見てもすぐトン語で読めるので、印をつけないという。

さらに注目したいのは、歌詞の本文に意味のない漢字表記を記していることである。「会介多歌」の二節の最初に以下の歌詞がある。

⑤ 短 吐 秀 歌 各 長 也 頼 帥
wanl touk soh al ags ah yaoc lail sais
一生 到る 声 歌 自分 私 良い 腸

【常に歌を歌うと心情はよくなり】

ここの「長」は意味を表す言葉ではなく、歌詞の本文に挿入された囃子詞のようなものである。「長」は歌を歌う時に「ah」(ア)と伸ばして歌うことを意味する。これは③「差悪長月二」にも見られる。ほかには「加」(jah, jav)の漢字表記で、「ジャー」と音を伸ばして歌唱する部分を記したのもある。呉応清氏によれば、音を長く伸ばして歌う部分を文字で記しておけばすぐ分かり、歌い続けることができるという、これがないと歌い続けることができないという。つまり、音を整えて歌を継続させる役割をしていると思われるが、ここには声に出して歌うもの、声音をすべて漢字表記で記そうとする歌師の意識が働いていると思われる。

最後に、漢語語彙を用いることについて見てみたい。「二月洋洋」の歌には、

⑥ 敗 卡 閻王 玉帝 務 門
bail ah yeens wangc yuis dis wul menl
行く あれ 閻王 玉帝 上 天

【天上に来て閻王玉帝に会い】

とある。「閻王」「玉帝」の名詞はトン語にはないため、これは直接漢語を用いて音読している。「二月洋洋」の歌には、ほかに「漢王」(hank wangc)もあり、これも同じく音読している。

以上のように、呉応清氏の「歌書」にある大歌を例にあげてみてきた。これらの特徴は、以下のようにまとめることができる。

1 トン語と同音またはトン語の音に近い漢字でトン語を表す。つまり、漢字の意味を離れて古代日本の音仮名表記のような用い方

である。

- 2 トン語の意味を漢字で表し、トン語で訓読する。漢字に印をつけたり、漢字でトン語の音を表せない場合は「×」記号を用いる。
- 3 漢字でトン語を表すが、漢字表記にも意味を持たせている。
- 4 特に意味はないが、音を長く伸ばして歌う、つまり歌唱の時に必要な囃子詞を漢字表記で記す。
- 5 漢語の語彙を用いて音読する。

1のトン語と漢字表記の音を見ると、声母と韻母が一致するのもあれば、声母だけ一致するもの、韻母だけ一致するもの、声母も韻母も一致しないが漠然と発音が似ているものなどがある。また歌師が漢字表記を用いる時に現地中国語の発音をそのまま用いていることが見られる。2は訓読についてである。一つは、トン語の発音を漢字で表すのが困難な場合、トン語の意を漢字で記して訓読する。たとえば矮(taemk)、快(hoik)、入(nyenc)、喊(sint)、出(ugs)、問(haemk)など印をつけて表す。韻母「aem」や「oi」、「ug」は漢語にない音である。もう一つは、同義の漢字がトン語の音と似ていることから、直接その意を表す漢字で表記してトン語で読む。「講(angsl)」、「聴(qingk)などであるが、実際にはトン語の言葉自体が早期の漢語借詞から来ている。しかし、トン語として定着しており、現代の漢語借詞とは明らかに発音が異なるので、訓読みに分類する^(注36)。3は、恋人の意を持つトン語「singc nyih」に「神女」という漢字表記を用いたことである。4は、歌詞の中に意味のない言葉、歌唱の時に必要な「長」(ah)、「加」(jah, jav)などと記すことである。これは歌が途中で切れないように、歌い続けるためだという。5は、「閻王」「玉帝」「漢王」などの漢語利用である。

このように呉応清氏の記録行為をみると、まずは音に拘っており、なるべく一字一音の漢字でトン語を表そうとし、基本的に音仮名主体形式に訓読、漢語の語彙などを加えて記している。さらに歌い続けるために音を伸ばして歌う部分まで忠実に記し、あくまでも本人が見て歌った状況をすぐ

再現できる、いわゆる歌うための歌書として記録していることが知られる。こうした民間に伝わる歌書は基本的に書いた本人にしか読めず、村の中または近隣地域に流伝することもそれほどない。

この調査でトン語や中国語訳などに協力を頂いた呉良明氏は大歌の歌手であり、彼自身もこれらの歌はすべて知っている。しかし、漢字表記の原文歌詞は簡単に読めないで、呉応清氏に確認しながらトン語の発音を文字で書いてくれた。もちろんこうした記録行為はそれぞれの標準中国語や現地中国語のレベル、漢字の習熟度、漢字やトン語の発音に対する理解力などと密接に関わると思われる。要するに、同じ歌でも使用する漢字表記は十人十色であるといえる。これは民間の歌師の記録行為は、本人の記憶の補助手段としてあり、人に読まれたり人に伝えられることを前提にしていないからだと思われる。また、大歌は古くから今に至るまで口承で伝わり、文字記録による伝承は今まで主流ではなかったのも一因としてあるだろう。それゆえに、トン族における漢字表記による記録の歴史は長いものの、現在においても体系化や規範化はされていない。

このように漢字表記の記録は一見無規則にもみえるが、必ずしもそうとは限らない。呉応清氏の記録行為に表れた音仮名主体形式に訓読、漢語語彙を用いる方法は、貴州榕江県の三宝（上宝、中宝、下宝）トン寨の歌書の記録方法にも見られる^(注37)。さらに、呉永誼氏が紹介した三宝の中宝一帯の歌書によく現れるトン音を表す漢字表記「多」(dos) —歌う、「報」(baov) —話す、「頼」(lail) —よい、「吊」(jiul) —私たち、「堯」(yaoc) —私、などは呉応清氏の歌書にも見られる。漢字表記にはっきりとした法則性や厳密性はないものの、そこには共通点が見られるのも事実である。民間に伝わる歌書や款詞など漢字表記で記された書物を総合的に整理していけば、諸種の問題が見えてくると思われる。また、三宝トン寨に伝わる歌書にも「父母」などの漢語の語彙がよく用いられているという^(注38)。歌師たちが意識的に漢語要素を取り入れることについて、龍耀宏氏は主に韻律と修辭の需要によるといい、漢語の語彙を用い

ることでトン語の語彙も豊富多彩になると指摘している^(注39)。こうした漢語語彙は、『侗族史詩—起源之歌』や『侗族款詞』にも確かめられる。『侗族款詞』の創世款には父母のことを「甫乃」(bux neix) と表し、ここではトン語で読むが、その数行後には「父母」(hul mux) と表記し、漢語の語彙を音読している^(注40)。韻律を整えるためか、同じ音の繰り返しを避けるためかまだ判断し兼ねるので、今後の検証が必要である。

四、おわりに

文字を持たなかったトン族が漢文化の影響を受け、漢文を身につけたトン族の知識人たちの台頭とともに、漢字表記を用いて民族文化を記録する行為へ至ったのは、歴史の必然であろう。これこそ東アジアの無文字民族が漢字との接触を通して獲得した方法であり、東アジアの共通する記録文化であるといえる。

トン族社会における漢字表記による記録は明清代までに遡り、民間では歌書、トン戯書、款詞など多くの写本が伝わっている。これとは別に、中央王朝の史書や文人の文献などにトン語をみることができ。宋代の文献に「玃矜」(仡伶) がみられ、これは反切の方法でトン族の自称「干」(gaeml) を表記したものである。また清代の『慶遠府志』『龍勝府志』『光緒古州府志』には漢語とトン語の辞書のような形で、漢字表記を用いたトン語が記されている。特に『光緒古州府志』には日常生活でよく使われる語彙が百以上収録されている。これらはトン族の民間の知識人が使うものをそのまま採録したか、それとも文人たちの記録によるかは測り知れないが、別の見方をすれば、清代にはすでに漢字表記を用いてトン語を記録する行為が広く行われていたことを説明する。しかし、漢字表記による記録行為はトン族社会全体に浸透しているのではなく、トン族の公式の「侗文」としても確立していない。歌師やトン戯師、款師、祭師、巫師などの漢文の教養のある一部の人によって行われていたのである。

呉応清氏の大歌の記録を例にあげると、基本的

に一字一音の漢字でトン語を記す方法を取る。つまり音仮名主体形式に訓読と漢語を加え、声に出して歌う部分まですべて記録し、歌唱するための歌書として記録していることが知られる。今回取りあげた呉応清氏の事例は、トン族の民間に伝わる漢字表記による記録のなかの一端にすぎない。それにも関わらず、呉応清氏の記録行為に表れる特徴は、古代日本の『万葉集』や『古事記』歌謡の表記法に相通じるところがある。『万葉集』は音仮名主体表記と訓字主体表記の形式があり、「法師」「餓鬼」など漢語の語彙を音読みすることや、恋を「孤悲」と表記する用例も見られる。また『古事記』歌謡(九)には「垂々〔音引〕」「阿々〔音引〕」と長音で発音することを示す表記が見られる。古代日本の歌との比較については、今後具体的に考察していきたいと思う。民間に伝わる書物は、中央王朝の正史に名を残すことはできなかったものの、トン族の大きな文化遺産であることは間違いないだろう。トン族の民間に伝わる漢字表記の書物を整理、分析すれば、トン族の漢字表記体系のみではなく、東アジア漢字文化圏における自国語や自民族語の表記形態が明らかにされるのではないと思われる。

注

- 1) 遠藤耕太郎「アジア辺境国家の歌表記——中国雲南省ペー族「山花碑」と万葉和歌の比較を通して——」(『日本文学』第60巻1, 2011年1月)、「アジアの歌表記から万葉東歌を考える——中国少数民族ペー族の歌表記をモデルとして——」(『アジア民族文化研究』12, 2013年)、「古事記歌謡の表記と口誦性——中国少数民族ペー族の語り芸をモデルとして——」(『国語と国文学』第90巻第5号, 2013年5月)。研究代表者 遠藤耕太郎「東アジアにおける「声の伝承」と漢字の出会いについての研究—中国雲南省ペー族文化と日本古代文学—」(『共立女子大学・共立女子短期大学 総合文化研究所紀要』第19号(3-2), 2013年)等がある。
- 2) 毛利正守「上代日本の書記の在りよう——東アジア漢字圏を視野に入れて——」(『万葉集研究』第34集, 2013年)、「倭文体の位置づけをめぐる——漢字文化圏の書記を視野に入れて——」(『万葉』第202号, 2016年)、「古代日本語の表記・文体」(『古代の文字文化』竹林舎, 2017年)等。
- 3) 洗光位主編『侗族通覽』(広西人民出版社, 1995年)。
- 4) 楊權・鄭国喬整理, 訳注『侗族史詩——起源之歌』上下冊(遼寧人民出版社, 1988年), 鄧敏文等主編『侗族文学史』(貴州民族出版社, 1988年)等。

- 5) 『宋史』(中華書局)。
- 6) 陸游撰, 李劍雄・劉德權點校『老学庵筆記』(中華書局, 1979年)。
- 7) 張民「浅談侗族与仡伶和伶」『貴州民族研究』1983年1期, 『侗族簡史』編寫組『侗族簡史』(貴州民族出版社, 1985年)。
- 8) 張民「浅談侗族与仡伶和伶」, 『侗族簡史』注7, 『侗族史詩——起源之歌』注4参照。
- 9) 英秀・恆悟修・唐仁等纂, 道光九年刻本『慶遠府志』(影印本)による。
- 10) 『侗族通覽』注3。
- 11) 鄭露『赤雅』(商務印書館, 1936年)。
- 12) 龍耀宏『侗語研究』(貴州民族出版社, 2003年)。
- 13) 周誠之撰, 道光二十六年刊本『(広西省) 龍勝府志』(成文出版社, 1967)による。
- 14) 『侗族簡史』注7。
- 15) 張民「浅談侗族与仡伶和伶」注7。
- 16) 余澤春修, 余嵩慶等纂, 光緒十四年刻本『光緒古州府志』(影印本)による。
- 17) 欧亨元編著『侗漢詞典』(民族出版社, 2004年)。
- 18) 張明・韋天亮・姚小雲「從貴州地方志看清水江地区的漢字記錄侗語情況」『貴州大学学报(社会科学版)』第32卷第6期, 2014年11月。
- 19) 欧俊嬌「『漢字記侗音』 文献的歷史文化價值」『貴州民族学院学报(哲学社会科学版)』總第126期, 2011年第2期。
- 20) 向零「一本珍貴的侗族古籍——『東書少鬼』」『貴州民族研究』(季刊)第2期, 1990年4月。
- 21) 注20。
- 22) 向零「侗族古籍『陰師言語』的發見及其主要内容」『貴州民族研究』(季刊)第3期, 1994年7月。
- 23) 洪邁『容齋隨筆』(上海古籍出版社, 1978年)。
- 24) 広西壮族自治区少数民族古籍整理出版規劃領導小組辦公室主編, 項目主編吳浩・梁杏雲『侗族款詞』上下(広西民族出版社, 2009年)。
- 25) 鄧敏文・吳浩『没有国王的王国 侗款研究』(中国社会科学出版社, 1995年)。
- 26) 『侗族簡史』注7。
- 27) 『侗族文学史』注4。
- 28) 欧俊嬌「『漢字記侗音』 文献的歷史文化價值」注19。
- 29) 『侗族史詩——起源之歌』注4, 趙麗明「漢字侗文与方塊侗字」『中国民族古文字研究』第三集(天津古籍出版社, 1991年), 楊權『侗族民間文学史』(中央民族学院出版社, 1992), 『侗族通覽』注3等。
- 30) 趙麗明「漢字侗文与方塊侗字」注29。
- 31) 漢字表記の原文は呉応清氏が記したものであり、トン語、中国語直訳、中国語意識などは岩洞小学校の教師呉良明氏にご協力をいただいた。日本語直訳、日本語意識は筆者による。トン語(トン文字)は『侗漢詞典』を基準にして修正を加えたが、歌詞①にある「leis」は呉良明氏が記した通りに従った。
- 32) 龍耀宏『侗語研究』注12。
- 33) 梁敏編著『侗語簡志』(民族出版社, 1980年)。
- 34) 『侗族史詩——起源之歌』注4。

- 35) 龍耀宏『侗語研究』注12。
- 36) 漢字でトン語を記録することについて、具体的に事例をあげて分析した論はまだあまりなく、筆者が目にしたのは呉永誼氏の論文「漢字記録侗語初探——以三宝侗寨民間歌本為例」(『貴州民族学院学報(哲学社会科学版)』総第133期, 2012年第3期)のみである。呉永誼氏は早期の漢語借詞をトン語で読むべきとして、漢字の義を借りて読む訓読みに分類する。また立石謙次氏の白文の分類から示唆を得た。立石氏は白文を音読, 訓読, 造字, 借詞に分類し, 訓読には白語由来と考えられるもの〔訓読み〕と漢語由来と考えられるもの〔音読み〕があると
- いう(「雲南省大理白族(ペー族)の白文(ペー文)における表記規範の一考察——特に「訓仮名」と「造字」を中心に——」『東海大学紀要文学部』第97輯, 2012年9月)。
- 37) 呉永誼「漢字記録侗語初探——以三宝侗寨民間歌本為例」注36。
- 38) 呉永誼「漢字記録侗語初探——以三宝侗寨民間歌本為例」注36。
- 39) 龍耀宏『侗語研究』注12。
- 40) 『侗族款詞』注24。